
ジャズクラブ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャズクラブ

【Nコード】

N4376W

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

シカゴのジャズクラブ。そこでジャズを聴きながら静かに話す男女達の恋愛は。都会のホワイトカラーのアフリカ系アメリカ人の女性を書きたくって書いた作品です。

第一章

ラス

ジャズク

アメリカシカゴのある店において。一人の女がカウンターにいた。背が高くすらりとしている。強い目の光は黒で長く伸ばした黒髪は波がかっている。唇は厚めで彫のある顔をしている。その肌は褐色だ。

その彼女がカウンターにいてだ。カクテルを飲みながら自分と同じ褐色の肌のタキシードのマスターに話すのだった。

「どうもね」

「何だい？アンニュイな気分なのかい？」

「そうね。アンニュイね」

笑いながらだ。彼女はこうマスターに話した。

「今はそうした気分よ」

「アンニュイねえ。あんにしたら珍しいな」

「珍しいかしら」

「うん、珍しいね」

実際にそうだと返すマスターだった。

「あなたは明るいイメージだからね」

「いつもそういうイメージじゃないわ」

「アンニュイな時もあるのかい」

「あるわ。それが今なのよ」

こう言いながらカクテルを飲む。赤い。ブラッディマリーだ。

それを飲みつつだ。マスターに話すのだ。

「今はちよつとね」

「何かあつたのかい？」

「仕事でね」

彼女、キャスリーン＝マケンシーは銀行で勤務している。やり手

の銀行員と評判だ。しかしその彼女が今はどうかというのである。

「ちよつと腑に落ちないところがあつてね」

「ミスをしたのかい？」

「ミスはしていないわ」

マケンシーはそれはないという。だがこつも言った。

「けれどね」

「けれど？」

「御世辞にも品のよくない客の相手をしてね」

「で、その客が預金をたつぷりしてくれたんだね」

「そうなのよ。あれは多分」

「マフィアかい？」

「でしょうね。そういう感じだったわ」

アル「カポネのいた街だ。そうした話は昔からある。そして今もだ。どうかというのだ。」

「よからぬ金を置いていったのよ。でその客を店長がね」

「丁重に扱ったと」

「そうよ。明らかに胡散臭い客でもお金を多く預けるのなら」

それでもだというのだ。

「いいのね」

「それが銀行じゃないのかい？」

「わかつてはいるわ」

一応はという言葉だった。

「けれどそれでもね。どうしてもね」

「腑に落ちないねえ。そういうのは」

「そうでしょう？まあ誰でもお客さんだけけれど」

「仕方ないね。そういうのは」

「そうね。だからそういう時はね」

「飲むかい？一杯位なら奢るよ」

マスターは手でシェイクさせながら話した。

「そうするかい？」

「そうね。それにね」

「それに？」

「音楽ね」

カウンターに座ったまま大人の笑みでだ。キャスリーンは言った。

「それも御願いですわ」

「そうかい。じゃあ音楽は」

「ジャズよ」

今度は微笑んでの言葉だった。

「それを御願いですわ」

「好きだねえ、相変わらず」

「ジャズは大人の音楽よ」

「そうそう、ジャズはね」

「こつした時には。やっぱりね」

「ジャズだっていうんだね」

「ええ。じゃあリクエストを聞いてくれるかしら」

笑顔でだ。マスターに言うのだった。

「そうしてくれるかしら」

「ああ、いいよ」

いいとだ。マスターも笑顔で応えるのだった。こつしてだ。

第二章

そのうえでだ。彼女はブラッディマリーを飲みながらその音楽を聴くのだった。そうして時間を過ごそうとしていたがそこにだった。隣にだ。若い男が来たのだった。

彼女と同じ褐色の肌を持っているが黒い直毛はアフリカ系のものとは少し違っていた。そしてはつきりとした二重の黒い目に薄い唇の横顔が見える。鼻が高い。

アメリカだけにいるヨーロッパ系のも入っているアフリカ系の彼が彼女の横に来たのだ。そうして彼はこうマスターに言うのだった。

「マスター、いいかな」

「いつものやつだね」

「うん、ジントニック」

彼はだ。そのカクテルを頼むのだった。

「それを御願いできるかな」

「いいよ。それじゃあね」

「それと音楽は」

音楽は何かを言おうとした。しかしだった。

ここでだ。彼は今かけられている音楽を聴いてだ。こうマスターに言うのだった。

「これでいいよ」

「そうそう、あんたはいつもこの曲だよね」

「うん、やっぱりこの店に来たらね」

「そうだね。決まってるよね」

「じゃあいいよ」

この曲でだ。いいというのだ。

「聴かせてもらおうよ」

「わかったよ。それじゃあね」

マスターは音楽をいじらなかつた。そうしてだつた。彼はそのジャズの音楽を聴く。その彼にだ。

キャスリーンはカクテルを手にしてだ。声をかけたのだった。「ねえ」

「どうしたんだい？一緒に飲みたいっていうのかい？」

男は軽やかなアメリカンジョークで彼女に返した。

「それなら願つたりだけれどな」

「そうよ。一緒にね」

その通りだとだ。キャスリーンは顔を正面に向けたままくすりと笑つて述べた。

「この曲を聴きたいのよ」

「この音楽をね」

「どうかしら。いいかしら」

「ジャズ好きなんだな」

「好きだから聴くのよ」

だからだとだ。キャスリーンは今度は声を笑わせて答えた。

「そうなのよ」

「そうか。あんたもこの曲が好きなんだな」

「思うところがある時に聴くには一番の曲ね」

「そうだな。確かにな」

「貴方もそうかしら」

自分はそうだと答えたうえでだ。彼に尋ね返した。

「思うところがある時に聴くのかしら、この曲は」

「ああ、そうさ」

これが男の返答だつた。キャスリーンの予想通りであつた。

「だからだよ」

「同じね。よかつたわ」

「人間つてのは難しいものだからな」

男の横顔が笑つた。キャスリーンはその顔を横目で見た。端整で何処か陰のある笑みだつた。

「だからな」

「それでなのね」

「ああ。今日は特にな」

「あつたのね」

「ったくな。色々あるさ」

飲みながらだ。彼は言うのであつた。

「仕事つてやつはな」

「何も無い仕事はないわね」

「おかしな客が来たり訳のわからないことになったりな」

「そこも同じね」

「あんたもか」

「だから。今この曲を聴いてるのよ」

それだとまた答えたキャスリーンだった。

第三章

「そして飲んでるのよ」

「飲んでる酒は違うんだな」

「そうね。私はブラッディマリーで」

「俺はジントニッケな」

そうしたところは違っていた。カクテルはだ。

しかし聴いている音楽は同じでだ。それだった。

「違う酒でも聴く音楽は同じか」

「面白いと思うのね」

「そうだな。じゃあ今日はこれを聴いたらな」

「どうするの？」

「家に帰るさ」

そうするというのが。今日はだ。

「あんたはどうするんだい？」

「私はもう少しここにいるわ」

「もう少しか」

「ブラッディマリーをもう一杯ね」

飲んでからだというのが。キャスリーンは酒も好きなのだ。

それでだ、飲んでだというのが、

「それから帰るわ」

「そうか。じゃあ俺もな」

「貴方も？」

「気が変わった。もう一杯貰おうか」

そうするというのが。である。

「そうしようか」

「そうするのね」

「ああ。じゃあ飲むか」

こんな話をしてだった。二人はだ。

それぞれの酒を飲みながら同じジャズの音楽を聴くのだった。それから店を後にする。

わざと暗くして独特の雰囲気醸し出させている店の中には二人の他にも客がいる。彼等もピアノやサクソで演奏されているジャズを聴いて飲んでいる。その中を進んでだ。

扉のところだ。二人でだ。

「それじゃあな」

「縁があればね」

二人で言つてであつた。そうしてだ。

それぞれ左右に別れてだ。店から消えたのだつた。この日から暫くしてだ。

キャスリーンはまたこの店で飲んでいた。この日は。

「今度は何があつたんだい？」

「上司がね」

上司の問題だというのだ。これも仕事をしていれば付き物の話だ。

「あれよ。セクハラよ」

「へえ、触られたのかい？」

「言われたのよ。胸が小さいってね」

「そんなに小さいとは思わないけれどね」

「気にしてるのよ。これでも」

こう言うキャスリーンだつた。

「結構ね」

「じゃあ言わないでおこな」

「言つたらひつぱたくから」

「じゃあその上司もかい？」

「きつと睨み返してやつたわ」

そこまではしなくともだ。そうしたというのだ。

「はつきりとね」

「へえ、ひつぱたなかつたんだ」

「あれで触つてたらね」

「ひっぱたいてたんだな」

「アメリカじゃそれ位普通でしょ？」

少なくともセクハラに厳しい社会であるのは確かである。キャスリーンもその中で生きているからだ。必要とあらばそうするのだ。

しかしその時代はそれをせずつにだ。そうしたというのだ。

言いながらまたブラッディマリーを飲みだ。彼に問うた。

「あなたもそう思うでしょ」

「まあね。俺もセクハラは嫌いさ」

「紳士なのかしら」

「紳士のつもりはないがそういうのは嫌いなんだよ」

「じゃあどういのが好きなのかしら」

「そうだな。ありのままかな」

こう答える彼だった。

「ありのままの相手がね」

「オーソドックスっていうことかしら」

「そうかもな。とにかくセクハラみたいな趣味の悪いことは嫌いだからな」

そうだというのだ。そんな話をしてだ。

キャスリーンにだ。こう尋ねるのだった。

第四章

「ところでな」

「今度は何かしら」

「あんたの名前は何ていったかな」

「私の名前へ」

「ああ。何ていうんだい？」

「キャスリーンの名前を尋ねるのである。」

「よかつたら教えてくれないかな」

「キャスリーンっていうのよ」

「まずは名前から答えたキャスリーンだった。」

「キャスリーン」マケンシーっていうのよ」

「キャスリーンっていうんだ」

「そうよ。いい名前でしょ」

「チャーミングっていうのかな」

「すっとした笑みを浮かべてだ。彼はこう返してきた。」

「そんな感じの名前だな」

「チャーミングね」

「外見はネービーの軍服が似合う感じだけれどな」

「言うわね。私は軍には興味がないわ」

「おや、トップガンにはならないのかい？」

「銀行員で満足しているわ。空には興味がないわ」

「へえ、俺は昔はパイロットになりたかったんだがね」

「彼はこんなことも言うのだった。」

「エアフォースでね」

「空軍に入りたかったの」

「まあハイスクールでホッケーに夢中になって。気付いたら忘れていてさ」

「今に至るっていうのね」

「そうさ。それで今はシカゴで真面目に働いてるって訳だ」

「成程ね。ところで私の名前を聞いたから」

キャスリーンはそれならとだ。今日もジントニックを飲んでいる彼に対してだ。こう尋ねるのだった。

「貴方の名前は何ていうのかしら」

「俺の名前かい」

「そうよ。貴方の名前は何ていうのかしら」

「ヘンリーっていうのさ」

笑ってだ。こう答える彼だった。

「ヘンリー＝レイギンっていうんだよ」

「ヘンリーね」

「オーソドックスな名前だろ」

「オーソドックスっていえばオーソドックスね」

確かにそうだとだ。キャスリーンも言う。

「けれど。似合ってはいるわ」

「似合ってるかい？」

「何処となくね。キザな感じがしてね」

「キザね。よく言われるさ」

「そうでしょ。感じるのは誰も同じよ」

「俺はキザかい。確かにキザさ」

「自分でも認めるのね」

キャスリーンは音楽を聴きながら言う。今日もジャズが上奏されている。ただしその曲はだ。前の曲とは違っていた。

その曲を聴きながらだ。その彼ヘンリーに言ったのである。

「そのことは」

「俺は素直だからな」

そのすつとした笑みで言うヘンリーだった。

「だからさ」

「自分で自分を素直っていう人間はいないわよ」

「そういう人間こそっていうんだな」

「ええ、悪人よ」

微笑んでヘンリーに言う。

「そう思うけれど」

「大抵の奴はそうさ」

ヘンリーはキャスリーンの言葉にこう返した。

「けれど俺はな」

「素直だっていうのね」

「しかも正直者さ」

「どうか。何度も言うけれど自分で言う人間こそね」

そうではないとだ。キャスリーンは語る。しかしだ。

ヘンリーはそのキャスリーンにだ。こう言うのだった。

「じゃあその根拠を見せようか？」

「貴方が素直だっていう根拠ね」

「それを今見せようか？」

微笑んでだ。こうキャスリーンに言うのである。

第五章

「そうしようか？」

「それができるのね」

「できるさ。じゃあしてみせようか」

「ええ。どうして見せてくれるのかしら」

「今かかっている曲」

その曲は何か。その話だった。

「俺はこの曲はな」

「知っているの？知らないの」

「知らない」

一言だった。言っただうえで微笑んでいる。

「全然知らない。聴いたことのない曲だ」

「あら、有名な曲なのに？」

「けれど知らない。知らないことは知らないって言えるんだよ」

「それが素直で正直だっていう根拠ね」

「これで信じてくれたかい？」

「信じるには根拠が弱いかしら」

くすりと笑ってこう答えるキャスリンだった。

しかしそれだけではなくだ。彼女はヘンリーにこうも言った。

「けれど。いいわ」

「信じてくれるんだな」

「そうさせてもらうわ。そうだったのね」

「知らないことは知らないと言う」

ヘンリーはここではやや誇らしげに話した。

「それが賢い生き方さ」

「正直に、素直に生きるのが」

「人間はそれが一番いいんだよ」

少し聞いたただけでは清らかな生き方だ。だが彼は同時にこんなこ

とも言った。

「そうすれば人様から信用してもらえるしな」

「打算もあるのね」

「人間打算もないとな」

「駄目だっというのね」

「ああ。正直と打算」

その二つを一つにしてキャスリーンに話すのだった。

「俺はそう思うけれどな」

「そうかもね。人間ってのは単純じゃないから」

「だからだよ。それじゃあ納得してくれたんなら」

「それなら？」

「この曲のこと教えてくれるかい？」

くすりと笑ってだ。キャスリーンにその彼の知らない曲のことを

尋ねるのだった。

「よかつたらな」

「いいわ。それじゃあね」

キャスリーンもだ。その申し出に笑顔で応えた。そうしてだった。

彼にその曲のことを話す。それからだった。

ヘンリーはその教えてもらった曲を聴きながらだ。キャスリーン

にこんなことも話した。

「成程ね。話を聞けばな」

「余計にっというのかしら」

「ああ、余計にいい曲に思えてきたな」

そうになったとだ。キャスリーンに話すのである。

「それじゃあ。もっとな」

「聴くのね」

「聴かせてもらっさ。この店でな」

「他の曲もよね」

「勿論さ。それはあんたもだよな」

「ジャズは好きだし」

その音楽から答えるキャスリーンだった。

「カクテルもね」

「ああ、この店のカクテルは確かにな」

「いいわね」

「ああ、いいな」

笑顔で話す彼だった。酒についてもだ。

「また機会があればな」

「飲むのね」

「飲むさ。あんたもだよな」

「勿論よ。それじゃあね」

「それじゃあ？今度はどうしたんだい？」

「この店での私の指定席はここだから」

このだ。カウンターの席だというのだ。

そこだと話してだ。さらにだった。

第六章

「何時でも待つてるわ」

「この店でジャズを聴いてカクテルを飲みたくなったら」

「それでいいわね」

「ああ。俺も指定席はな」

「ヘンリーもだ。こうキャスリーンに言うのだった。」

「ここだからな」

「私の隣にするのね」

「ここでいいよな」

「構わないわ」

すつとした大人の笑みで答えるキャスリーンだった。

「少しでも嫌なら嫌ってはつきり言うから」

「いいね。わかり易くね」

「あくまではつきりとわかり易く」

こんな風にも話すキャスリーンだった。

「それがアメリカの女じゃない」

「だからだよな。それではつきりと言うんだな」

「嫌なこと嫌ってね」

「わかったさ。じゃあ俺もはつきり言うな」

「席はここなのね」

「ああ、ここだ」

彼が今座っているだ。その席だというのだ。

「ここにいるからな」

「わかったさ。それじゃあな」

こんな話をしてであった。

二人はこの店では隣り合って飲みジャズを聴くのだった。マスタ
ーはその二人にあえて何も言わずに己の仕事に徹していた。そんな
中でだ。

あるヘンリーがだ。こうキャスリーンに尋ねた。

この日も二人で隣り合って飲んでいる。その中でだ。

彼はキャスリーンにこう尋ねたのだった。

「一つ聞いていいか？」

「今日は何かしら」

「あんだ。いつもここじゃ一人だけれど」

「二人よ」

しかしこう言うキャスリーンだった。

「そうじゃないかしら。二人よね」

「おっと、そういえばそうだな」

「そうよね。二人よね」

微笑んでだ。ヘンリーに言うのである。

「いつも二人よね」

「そうだな。それじゃあな」

「どうだっていうの？まだ尋ねることはあるの？」

「店の外じゃどうだい？」

キャスリーンに一本取られたがそれでもだ。取り返す為に今度は

こうした感じで尋ねるのだった。

「この店の外ならね」

「二人になりたいわ」

今度はこう返すキャスリーンだった。

第七章

「ジャズを聴きながらね」

「言っねえ。実はな」

「実は？」

「それは俺もだよ」

いつものジントニックを飲みながらそうだと話すヘンリーだった。

「俺もそうなんだよ」

「ふうん、そうなの」

「そうさ。それじゃあ」

ブラッディマリーを手にしているキャスリーンにだ。一呼吸置いてから話す。

「店の中でも二人で聴きたいな」

「二人でね」

「駄目かな、それは」

「ええ、駄目よ」

キャスリーンは微笑んでだ。彼に告げた。

「残念だけれどね」

「やれやれ。そう言うのかい」

「ジャズだけじゃ駄目よ」

すぐにだ。ヘンリーに返すキャスリーンだった。

「その他にもね」

「その他にもなのかい」

「そう、お酒と」

「まだあるのかい」

「二人で」

もう一つあるというのだ。今度はそれだった。

「そうしたいのだけれど」

「言っねえ。実は俺はさ」

「貴方は？」
「今一人なんだよ」
「離婚でもしたのかしら」
「いや、慰謝料とかの話じゃなくてな」
「離婚はしていないのというのだ。ヘンリーはその事情も話す。」
「結婚する前に別れたんだよ」
「ダメージは最低限で済んだのね」
「経済的なことはな」
「精神的にはどうかしら」
「結構きたぜ」
「笑いながらだ。キャスリーンに話すのである。」
「まあ今は落ち着いたけれどな」
「失恋ね。何度経験してもあれはね」
「辛いものだよな」
「私の最後の失恋は半年前だったわ」
「へえ、案外最近なんだな」
「結構こたえたわ。それでね」
「どうしたかというのだ。その失恋をだ。」
「ここで飲んでジャズを聴いて癒したのよ」
「酒に音楽か」
「そういうことよ。それで癒えたところで」
「ヘンリーが来たというのだ。その話をしてからだ。」
「キャスリーンはブラッディマリーを飲み。ジントニックのヘンリーに言った。」
「これまではお店の外でお別れだったけれど」
「これからはどうするんだい？」
「そこから先も二人でどうかしら」
「いいね。それじゃあな」
「何処に行くかはまだ決めていないけれど」
「店を出てもだ。それはというのだ。」

そんな話をしてだ。そうしてであった。

二人は今それぞれ飲んでいるカクテルを飲み終えた。音楽も終わった。

それでだ。カウンターにいるマスターに言うのだった。

「それじゃあね」

「今日はこれで」

「おっと、帰る前にね」

その二人にだ。マスターは。

二人にだ。それぞれだ。

キャスリーンにはジントニック、ヘンリーにはブラッディマリーを出してだ。そのうえで二人に対して笑顔でこんなことを言うのだった。

「奢りだよ。飲みな」

「あれ、私がジントニックで」

「俺がブラッディマリーか」

「それを飲んでお互いのことを知るんだな」

お互いに酒を取り替えてだ。そうしてだというのだ。

「そうしな」

「パートナーのカクテルから」

「そういうことが」

「おめでとう」

マスターは二人に笑顔で話した。

「二人の幸せのはじまりに乾杯だよ」

「有り難う。それじゃあ」

「これからこの店に来るからな」

「待ってるぜ。ただしな」

マスターは笑顔でだ。二人にこんなことも言った。

「奢るのは今日だけだぜ」

「わかってるわ。それは」

「ちゃんと支払うさ」

最後は笑顔で返す二人だった。その二人の耳にだ。

次のジャズの曲が聴こえてきた。その曲は二人共よく知っている曲だ。恋愛のはじまりを歌った。そんな洒落た明るい曲だった。

ジャズクラブ 完

2011・6・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4376w/>

ジャズクラブ

2011年9月5日03時27分発行